

# 「キット・ブランドン」を読む

—キット・ブランドン、一求道者の足跡—

佐久間 由 尋

*On Kit Brandon : Her life and Education*

Yoshikazu SAKUMA

厳しい自然環境と産業主義による環境破壊に故郷の山間の土地を追われた人々を待っていた非人間化した工場生活。そんな中で、天衣無縫なKitが奢侈な生活に溺れていくある種の必然性。そして参入した、禁酒時代の密造酒組織の持つ貪欲、奸計、残忍さ。やがて組織の冷酷さ、や諸悪への憤りを禁じ得なくなる。同時に人生への疑問を抱く。激しい孤独感や疎外感に苦悩しながらも、Kitが人生への新たな可能性を確信するまでの足跡を辿る。

Life not death is the great adventure.

—Sherwood Anderson—

はじめに

Sherwood Andersonが1936年に出版した*Kit Brandon*は、彼の最後の長編小説となった。1935年、国税法の違反の共謀で、34名が裁判にかけられた。禁酒法は既に廃止されていたが、密造酒をめぐる山間の人々のもとに出入りする大都市の秘密組織が活動を続けており、小規模の製造者が大手に操られ、搾取されている実態があった。そこで、時の財務長官Henry MorgenthauはAndersonにこの裁判の調査を依頼した。その中で彼の関心を引いたのが、マドンナの存在のMrs. Willie Carter Sharpeと言う若い女性であった。彼女の生い立ち、そして捜査官の網をくぐり抜ける大胆さと巧みな車の操作、その人柄に日頃は生真面目なご婦人たちがすら彼女の車への同乗を願い出たと言う、大変人気を集めた人物であった。<sup>(1)</sup>

この実在の女性をモデルにした本作品は、さながら活劇を思わせるものがあり、Andersonの作品の中でもユニークなものである。

Andersonの特に後期の優れた作品を集めた*Southern Odyssey*の中で、編纂・解説をしているWelford Dunaway Taylor並びにCharles E. Modlinは、本作品のヒロインKitについて、'Kit recounts events from her early life and her fascination with fast cars and the thrill of the chase; とこの通俗的に関心を引く点に触れながらも、'Her real desire is for the usual hu-

man needs – respect, love, a mate “with whom she could make a real partnership in living.”<sup>(2)</sup>と敢えてつけ加えている。

因みに、作品の舞台は、かつて中西部がWinesburg, OhioやPoor Whiteの舞台となったように、本作品ではSouthern Highlandsが舞台の中心になっている。<sup>(3)</sup>それまで各地を転々としていた作者が、唯一つ、この舞台となるthe Southern Highlandsの山地や周辺の町には、十年以上に渡り地域の人々の中に入って生活してきた。従って風土や状況や人々の暮らしを熟知しており、個々の事件の光景や体験を語るとき、その真実味と得心の力は大きい。<sup>(4)</sup>

この小論では、主人公の遍歴とその生き様に、現代に生きる人間の苦悩とその解脱の過程を追ってみたい。

## 1

物語は、語り手の私なる人物が、South Dakotaでヒロイン、Kit Brandonに会い、彼女から身の上話を聞き出す形で始められる。

Kitは16歳の春に生まれ故郷の山地から家出をして、South CarolinaのGreenvilleにある紡績工場で働く。やがて、Agnesと言う労働運動に熱心な女性と交際したり、同じく工場で働くFrankと言う青年や彼の従兄弟のBudとも親しくなり、四人で郊外へピクニックに出たりする。淡い恋心を寄せていたFrankも結核で世を去る。さらに、Sarahと言う女友達もできる。彼女を通して自動車の運転を身につける。やがて、よりよいチャンスを求めて、独り、大きな工業の町へ向かい、靴工場で働く。更にまた、今度は有利な仕事の噂に次の町へ移動し、店員として働く。そこで夫となるGordon Halseyに見そめられ結婚する。彼の父はアメリカの禁酒時代のある密造酒組織のトップの座にある。Kitの眼には、故郷の山地を出て以来はじめて見る、男らしい男に映る。彼女には、流行の衣装を纏い、贅沢な品々を買い求め、夢見ていた豊かな生活が保証された。しかし、夫婦の関係はスムーズには行かない。Gordonと別れて、好きな自動車の運転と、物質的に恵まれた生活を捨てて、工員や売り子に戻る気になれない。この生活を維持するために、別居はするが、義父Tom Halseyの密造酒組織の一員として働くことになる。ここから、世間に名だたるQueen of the RumrunnerとしてのKitの生活が始まる。

## 2

始めに、Kit Brandonの家出の背景を見ておきたい。ブランドン家が住み着いていた土地はthe Blue Ridge mountain countryにあり、十八世紀の独立戦争以前から、English, Scotch-Irish, Dutch等の先祖が住み着き、父権を中心とした、山岳人特有の口数少なく、プライドの高い人々の社会を形成していた。生活上、大変きびしい立地条件のもとにおかれていた。

You work a piece of new ground, brush-grown – angle of thirty, or even fort-five degrees – plow it, cultivate your corn, hoe it, ...

Rains come and wash your land away. It washes away down into the mountain streams,  
(5)  
...

このような風土のもたらす制約に加えて、樹木の根切り、根の掘り起こし等、開墾の厳しさもあった。さらに、これに追い打ちをかけたのが、産業主義の時代の到来であった。

The great lumber companies came, the coal companies, ripping out the timber, ripping out the coal. The big companies left a wild country more wild. There are deserted mining and lumber towns, denuded hills, once covered by majestic timber, the soil now washing away with every rain, clear streams made muddy, the hills every year growing more and more bare – an old old story in America now. “We are after the money. Let the land and the people of the land go to hell.”<sup>(6)</sup>

丹誠込めて作り上げた肥沃な土地は、企業の無謀さによって荒らされ、或いは洗い流されてしまった。生活の基盤を奪われた人々は、既に自活が苦しくなっており、機械による生産工場が近くの町に来たとき、一家をたたんで山を下りる。

また一方で、大量生産とカタログ販売のシステムは安価な流行品をもたらし、若者の心を引いた。Kitが年頃を迎えたとき、町の豊かな生活へと心が向かうのも頷けよう。

Kitの場合、家出の原因は、父娘の関係にあった。母は怠惰で家事すらも行わない。全く働く意欲を持たない。家事を始め野外の仕事や家畜の世話など一切を彼女が母親に代わって父親と協力してやって来た。時代はまさに1920年代の禁酒時代で密造酒の需要が急増した時であった。Kitの父Johnもこれに関わり、町からいかかわしき男達がKitの家に姿を見せるようになる。そんな一人にセクハラを受け、性に目覚める。その後、父親と母親の不和があっただけで、ただ一人頼りにし、また信頼していた父親から同様の危険をKitは感じさせられた。彼女はその日のうちに家を飛び出してしまふ。Kitの家出及びその人生への発端は、家庭の問題もさることながら、時代と地域に大いに関係があると言えよう。

### 3

幸い、親切な老人の車に拾われ、町に着くと、老人の姪の世話で紡績工場に職を得る。初め、工場生活はKitの気に入ったものであった。

The thread came dancing, dancing, dancing. “It made you want to dance,” Kit said. She began to like her life in the factory.<sup>(7)</sup>

ここには、初めて眼にした近代的な機械の機能や頼もしさに感動しているKitの姿がある。しかし、やがて工場の生活にも慣れ、周囲の様子が見えてくると工場の持つ矛盾に気づいて

くる。

In the factory ... great care was taken to keep the dust from accumulation on the machines. Hoods came down over the machines to suck the dust from them while the workers were left to breathe it into the lungs.<sup>(8)</sup>

人間の健康よりも、機械を埃から守ることが優先される。これは、Glen A. Loveの言う、the perversion of values in the mills<sup>(9)</sup>である。この矛盾は現実の悲劇となって現れる。当時、彼女の唯一人の男友達であり、同僚のFrankがthe fine cotton lintを吸い込み続けたことがもとで、結核になり命を落とした。

ここで、Andersonが警鐘を鳴らしている、機械文明のもたらす今ひとつの問題点を*Perhaps Women*の中にみてみよう。これは、彼が今、問題になっている類の紡績工場を訪ねて、後に書いたものである。

The machine has taken from us the work of our hands. Work kept men healthy and strong. It was good to feel things being done by our hands. The ability to do things to materials with our hands and our heads gave us a certain power over women that is being lost.<sup>(10)</sup>

ここでは、機械が人間から仕事の喜びを奪ってしまっている。力と能率において遥かに人力を凌ぐ機械の前に人間が敗北している。とりわけ男性にとって、自ら磨き上げてきた技量、それは自身の存在を裏付けるものであり、男性としての誇りであった。しかし、今や、機械の持つ強い力はその男性を遥かに越え、男たちに彼らの非力を見せつける。女性たちは、男性以上の力を持つこの機械の逞しさに、これまで男性に寄せてきた期待や感動や敬意を、もはや抱かなくなる。

作品の舞台となっている地域でも例外ではない。山間の家族が町へ出たとき、男性は、自分たち以上の力を持つ機械の前では、女性に対して誇っていた力や技術を、誇らしく示すことが出来なくなってしまう。女性たちは、自分たちが男性にかわって、これまでの男性の、いや、男性以上の仕事を、機械によって、自力で出来るようになる。新時代の職に馴染まない中年以上の男性は、持ち場を失っていわゆる、*mill daddies*として、家の辺りでぶらぶら無為に過ごす生活へと追い込まれてしまう。彼らは己の技量を生かす場を奪われ、独立心とプライドを著しく傷つけられる。このように、時代の波の中で、いわば敗者となった男たちからは、女性が求める、男らしさ (*maleness*) の魅力は失われてしまっている。

若い男性にとっても事情は同じである。機械化は同一化、標準化を育み、個人の力や個性の発現を抑え、人間の画一化による無感動な人間を生む。

... I was to understand that when you take from man the cunning of the hand, the

opportunity to constantly create new forms in materials, you make him impotent. His maleness slips imperceptibly from him and he can no longer give himself in love, either to work or to women. “Standardization! Standardization!” was to be the cry of my age and all standardization is necessarily a standardization in impotence.<sup>(11)</sup>

ここに、Andersonは、現代のstandardizationの機構が結果的に男性のimpotence（無気力）を招来すると指摘している。Kit等が働く工場生産はこの standardizaionの上に成り立っている。女性にとって、生き生きとして力強く魅力ある男性の姿は周囲に見られなくなる。Kitの先輩格にあたる仕事仲間のAgnesは、労働運動で、指導者はストライキや争議を先導しながら不利となると、組合員や後始末の事など振り返りもせず立ち去ってしまうなど、その問題点を認識している。それでいながら、空しい労働運動に情熱を注ぐ。男性への関心はまるでない。そんな彼女の気持ちを理解するには、次の引用が役立つ。

Most of the men, the workmen, young and old, in the cotton mill ... so many of them like consumptive Frank ... if they were not tubercular they were at least stoop-shouldered men, many with narrow chests ... they had spent too much of their young lives eating cotton lint, breathing it into their lungs.<sup>(12)</sup>

ここに描かれている、気力も乏しい何かに疲れ切っている姿の男性に、若い女性の心を動かせる魅力や力があるであろうか。さらにテキストは続く。

It might be that Agnes needed and even wanted gentling by life, by intimacy with some man, but where among the mill men was she to find one to do it to her?<sup>(13)</sup>

彼女の情熱を吸収できる男らしい男性が存在しないのである。彼女はFrankの従兄弟が馬に憧れ自ら馬の真似をするのを見てショックのあまり、“It isn’t that we want, to give up manhood.”と後は口ごもってしまう。このAgnesの言動に男性への期待と失望とが集約されている。

Kitにしても、彼女は、自動車がまるで恋人であるかのように、すっかり運転にのめり込んでしまう。これは、Kitが男性に自然な人間的期待を抱けなくなっている事を裏付けていると見てよい。

Irving HoweもKitの自動車狂を次のように説明する。

Having been unable to find gratification in her own sexual role, she gains through her wild driving a sense of malelike mastery; the car becomes a sexual fetish and her domination of it both a symbol of her scorn for men and a surrogate for the love she has not had.<sup>(14)</sup>

しかし、Kitの屈折した心は自動車だけで満足するようなものではない。

再び*Perhaps Women*からAndersonの言葉を聞こう。

If they [= women] can’t get what they want, they will take what they can get. If they

cannot get men, they will take goods. <sup>(15)</sup> ([ ]内は筆者)

この指摘を裏付けるかのように、Kitはさらなる物質的快樂を追求する事になる。彼女の交友も、はじめの頃のAgnesに代わって、Sarahとの交友を深めるようになる。Sarahは裕福な弁護士Joeの情婦になっている。a gold-diggerとしてJoeから金品や自動車を手に入れ、その自動車をKitにも利用させる。また、その金でKitを一流のホテルの食事に誘う。

“Life’s a game.” “Play to win.” “Learn to use what you’ve got.” “If you don’t put it over them they’ll put it over on you.” <sup>(16)</sup>

これがSarahの処世訓である。女性としての魅力を武器に如何に自分のほしい物を手に入れるかが彼女の人生哲学である。KitはSarahのこうした生き方にいっそうの関心と共感を覚えるようになる。Kitは宗教的関心など全くないが、上流社会への関心から教会へも通う。

男性を見る目も同様である。既に指摘したように、彼女には人間的な意味での男性への期待はない。専ら、実利的な観点から異性に接近する。彼女は工場主の息子の誘惑にもものる。妻の座におさまることを期待してのものであったが、しかし、それは失敗におわった。又、一方で物質的利益から見て価値のない者は冷たくあしらう。イタリア人の母親と息子には、彼らがKitに関心を持っているのを知りながら、関わりを避ける。価値がないと思えば、冷たくあしらう。車でドライブに誘う青年には、彼の腹のうちを見抜き逆手にとって、彼に目的地まで送らせて姿をくらます。このあたりはSarahの‘Life’s game.’の人生哲学を見事に実践している感がある。最後にKitはa five-and-ten-cent-store girlとしてthe Woolworth storeの文具売場で働く。そのKitをお目当てに足繁くやって来るGordon Halseyのプロポーズを渋々受け入れるが、ここでも、彼女はSarahから学んだ人生哲学に則っている。自分の魅力が如何に高く売れるか、が問題であって、彼の人柄に魅力があったわけでない。後に、Gordonの父Tomへのある種の敬意の念が働くが、少なくとも当初は、素敵な車と贅沢を保証する経済的な富みが目当てであった。そもそも彼女は、結婚すら一方便に過ぎないと見ている。

She had got for herself, vaguely, a kind of idea ... her marriage, to Gordon Halsey, son of the successful big bootlegger, had been a part of a kind of program she had made for herself. <sup>(17)</sup>

これは、例えば、“Winesburg, Ohio”の中で、結婚を絶対化し生涯その呪縛に苦しむヒロインのAlice Hindmanとは対蹠的である。Kitには、自然児のように、己の意のままに生きる自由奔放さがある。

#### 4

時は、禁酒法により密造酒の闇の取引が盛んになりつつある時代であった。又、先に述べたように、産業主義による著しい環境破壊と厳しい地理的条件の中でmountain farmersは生

きるために必死であった。幸い収穫にこぎつけたcornにしても中西部などに比べ貧弱なcornである。品質や搬出の軽量化を考えると、ウイスキーへの加工は好都合であった。しかも人々の多くはScotch-Irish系で先祖以来のwhiskey makersであった。しかし、違法の仕事であれば、政府の取り締まりと、いわゆるギャング団による略奪から自らを守るために、酒造者仲間は次第に組織化されていった。Gordonの父、Tom Halseyはmountain farmerの出身であるが、努力と才覚によって密造酒組織を支配していた。富は手に入れたが彼には俄成り金のコンプレックスがあり、上流階級への夢がある。しかし一人息子のGordonが全く頼りにならない。家系が劣る成金的なHalsey家を、そこそこの家柄へと高める事も含め、Tomの期待はいつかは来るGordonの子、つまり孫に向けられていた。

Kitの知恵と勇気とプライドにTomは好感を持ち、彼女の方も、父親に似た、山岳地方の出身者に特有の、男らしさに好感を抱く。これによって、Kitは決めかねていた、Gordonとの結婚を決断する。

しかし、父親への好感と背後の富の魅力が優先し、Gordon本人への愛と信頼を伴わない結婚に満足はあり得ない。ホテルの最高の部屋に新居を構え、流行の衣服に身を包み、何台もの車を存分に乗り回し、贅を尽くした生活に代償を求めるが、次々と女と浮気をし、やさしさと男らしさに欠ける夫GordonはKitにとって鬱陶しい存在になる。さらに夫の愛人からのラブレターを発見し、彼との離婚を考えるが、今更女工や店員の生活にもどる気にはどうしてもなれない。彼女にとって恋人である自動車を運転出来なくなることは何より耐えられない事である。結論的には、籍はそのままで、実質的な離婚をして、Tomの組織の一員として働くことで、現在の生活の維持を考える。幸い当初からTomの信頼を得ていたこともあり、Tomに望み通り孫（Gordonの子）を提供できない代わりに、仕事を通して貢献する名目で、この提案は了承される。

一見すると、目出度く落着くと思えたが、ここからKitの苦難の人生が始まる。

## 5

Kitは密造酒の運搬や運搬車集団の先導者として、好きな車の運転技術を誇りに仕事での活躍に誇りをもつ。男性の仕事仲間もできる。彼等との交際は、Gordonの心を悩ますが、Kitは夫の浮気や不甲斐なさへの仕返しと割り切る。スポーツマンで、カーレースを楽しむ気分でこの危険な仕事に参入してきた大学生のJimは、親のAmerican Dream的な期待への反抗が動機である。Kitは、彼から大学や学問など未知の世界のことを学ぶ。又、別の青年Alf (Alfred) は、いわゆる名門の息子でありながら、出生の秘密や父母双方の家柄の相違に悩む。彼は、南北戦争での祖父の英雄伝説への無邪気な崇拜熱に酔いきっている。その反面で、偽善的な父に反抗して、Tomの組織の一員となり、自分が家名を汚すことをどこかで願って

いる。Kitはこの青年からはアメリカの歴史や名門一家が抱える問題と、その中で矛盾に悩むこの青年の御しがたい心の内を知る。彼女はこれまで専ら私的関心と利益のみを追ってきたが、かつてFrankにたいして抱いて以来、忘れていた他者への関心や同情が自分の中に生じるのを感じる。特に自分を慕いすべてを打ち明けるAlfには母親のような思いを感じないではいられなくなる。ここに、Kitの人間的な成長がみられる。この背景には、後にふれる、彼女の耐え難い孤独な環境があった。

他方で、TomのKitへの態度が大きく変化する。かつて、KitがGordonと結婚して間もない頃は、話題に乏しく金銭には渋い夫に比べ、時折、話をしに立ち寄り、金銭面でも鷹揚で思いやりのある男らしい人物であった。しかし、今はKitを訪ねる事もなくなり、仕事の指示も妻のKateを通してするようになる。彼の夢であった孫への期待を抱けなくなった時、Kitは組織で働く一使用人に過ぎなくなった。

実は、Tom自身も大きく変わった。はじめは密造酒の取引を通じて、山間に住む人々の生活を支える救済的存在であった。Tomが、かれらの仕事と生活を保障してくれていたのである。しかし、そんなTomが強欲になり、人々への手当の額をカットするようになる。蓄財の増大が彼を金銭的に貪欲にし、組織の膨張が、彼を地位と権力へ異常なまでに執着させるようにしてしまう。小さな密造者たちを密告して、役人から見返りに、自分の仕事に便宜をはからせる。また同時に彼らが出獄後は自分の傘下に加え組織の拡大を計る。又、Tomの非情な態度は組織の身内にもあらわれる。Jimがスピードと操作を誤り非業の死を遂げたとき、Tomは親にも知らせず、処理し闇に葬ってしまう。また、Alfの、蛮勇を英雄と見紛うロマンチックな純真さを、悪用して、彼に組織内の反乱の首謀者を銃殺させる。

She imagined Tom's working, as he would have worked, on the mind of the boy, making him think the deed he was to do was something heroic. The boy was to prove himself to Tom as perhaps his grandfather, the Mosby man, had in his time proved his courage and the coldbloodedness that is also a part of war to himself and others.<sup>(18)</sup>

つまり、南北戦争で、特殊部隊のthe Mosbyの一員として、当時の非常事態のみ英雄視が可能であったAlfの祖父の時代の英雄観を、そのまま、無邪気で世間を知らないAlfに上手にけしかけて、反逆者Wyagleを殺させた。Tomは自らの手を汚さずに彼の地位を脅かす邪魔者を排除した。

その後Alfは自分の犯した罪に怯え、苦しみ、いずこへともなく姿を消してしまう。これは、卑劣極まりないTomの非人間的な行為であり、己の利益を守るためには、殺人でも平然と行う利益追求優先の論理である。

Kitは、初めて他者のために、Tomに対して心から憎悪の念を燃やす。

She had been terribly excited and was filled with a feeling new to her. For the first



time in her life she hated sincerely, wholly.<sup>(19)</sup>

ここには、明らかにKitの倫理性が現れてきている。これまでの彼女の行動には無道徳性が感じられてきた。女工及び店員時代のKitの行動は、ゲーム感覚に基づく対等の競争意識であった。密造酒に関しても違法と言いながら必要とする人への奉仕の意識があった。

‘There would be no such business if people didn’t want it. I am the same girl who once worked in a factory, who worked in a five-ten-cent. I haven’t hurt any one, stolen anything. There was in her no feeling of being morally corrupt.’<sup>(20)</sup>

密造酒の関係の仕事も、Kitには、工場や商店で働くことと変わらないのである。彼女には罪悪感はなかった。

## 6

山間の人々は寡黙であり、又、孤独になれている。

Mountain people, like Indians, can work or sit together for hours without speaking.<sup>(21)</sup>

They hung on up there in their hills, quite isolated, strong enough people, in the very heart of America, sticking tight to their barren hills, ...<sup>(22)</sup>

多弁な人々との交わりよりも孤独を好む。しかし、都会の静けさは山の静けさとは異なる。Kitも初め紡績工場で働きだした頃は、山の静けさを思い起こすのを避けるため、夜勤にまわった。しかし、靴工場で働く頃には都会生活も長くなり、様々な知識や体験を求めて一人で行動をするようになり、都会での独居や孤独にもすっかり慣れていった。

しかし、Tomの組織の一員として活動するようになると、孤独の意味が変化する。それまでの孤独は自ら好んでの孤独や独居であった。それに対して、密造酒運搬のパイロットとして働くときの孤独は、強いられた、相手との距離を作らざるを得ない孤独や独居であった。仕事の関係上、夜間に運搬をし、昼はどこかに身を潜めている。美人で運転の腕の立つ女性パイロットとして、世間でも評判になると、いっそう人前に身をさらせなくなる。一方では、組織への反逆の懸念から、仲間同士の接触も許されない仕組みになっている。先のJimやAlfの場合も、車を降りれば、宿へ入るのも別々、私的な団欒は持てない。また、身辺に、警察や組織の双方からの監視やスパイの眼がひかりだす。Tomの回し者か、当局の回し者か、ダブル・スパイか、造反陰謀の輩か、Kitには情報を匂わせて接近してくる人物たちの実像がわからない。明らかに感じるのは、得体の知れない危機感と孤立無援の孤独感のみである。

家族関係の変化もKitの孤独感を強めた。Tomの態度は大きく変わった。一、二回は顔を合わせたか、Kitに唾をかけんばかりの侮蔑的な態度になった。Tomの忠実な部下として、妻Kateは常にクールで無表情である。寄り縋る術もなく、Kitの孤立感と疎外感は募る。彼女の心にはどんな安らぎもない。

彼女自身の名前も、度重なる逮捕や裁判から、カモフラージュするために、様々な偽名に変わる。Like a criminal she constantly changed her name ... Kit Brandon, alias Mary Wetherby, alias Sally Smith, alias Mrs. Eugene Masters, alias Erskine Hemmingway.<sup>(23)</sup> これでは、自分が一体誰なのかも、わからなくなってしまう。

7

Alfへの冷酷非道な扱いや一連の理不尽な行為に対して、Tomへの復讐の決意を後押しをしたのは、この孤独感、孤立感、疎外感であった。

そんな矢先にTomから呼び出される。Tomを殺せば自分も殺される事は承知の上で、非道を裁く意義と使命感に燃える。Kitは死を覚悟し、使い役の夫GordonとTomのもとへ行く。結局、Tomの部下たちに羽交い締め<sup>(24)</sup>にされる。彼らが殺害すべくKitを夜の闇に連れだそうとする寸前、思いがけない事態となる。Tomの周囲に張り込んでいた警察が一斉摘発を行った。その混乱の中、Tomは恐怖に狂ったわが子、Gordonの銃に倒れ、Kate以下全員が逮捕されてしまう。Kitはひとり闇に紛れて、近くの森に隠れ、偶々駐車してあった車を使ってその場から逃れる。

She felt free and was happy. For weeks she had been wanting to give up the life she had been in. ... There had been something that held her and she had even gone to the length of wanting to kill Tom with her own hands, to shoot him, stand and watch him die and now the feeling was all gone.<sup>(24)</sup>

これは、現場から、数十マイル離れた森に車を止めたときのKitの姿である。この時点では、KitはまだTomの死を知らない。あれ程までにTomへの正義の鉄槌にこだわり、自らの命を賭けていたKitの情念は綺麗に消えてしまっている。この開放感は一切何を意味するのであろう。そもそもKitは死を覚悟してTomの本拠地に乗り込んでいった。結果的には、予期せぬ当局の摘発でTomの組織の壊滅となり、Kitには、ある種の達成感もあったであろう。しかし、彼女自身は、まだ警察の手から完全に逃れていないのである。

彼女はここで、着用していたthe suit and short coatを、the black dress and the black sunbonnet<sup>(25)</sup>に着替える。わざわざ、作者はit is also necessary to dress in black at a funeral.と説明まで加えている。つまりこれは喪服である。何の葬儀に備えてであろうか。Tomの組織の消滅と彼女自身が過去の生活から決別する意味に解釈出来るのではなかろうか。とすると、次に引用する文の意味との関連が明らかになる。

Kit had the odd, really absurd feeling that it was all outside herself, as though she were in an audience and saw a play going on in a theatre.<sup>(26)</sup>

これはKitが服装を着替えて、近くの町へ出て、若い男たちが警官に連行されている光景を

目撃したときの彼女の印象である。さながら、初めて世間を眼にする人間の観がある。この男たちがTomの仲間で、保身のためKitの身を暴露する可能性もある。そんな不安からも、本来ならば緊迫した感情が語られて良いはずである。喪服は、彼女がTomの組織との生活を葬り去ってしまった、その心の現れと見る事が出来よう。

彼女は、今これまでの生活の外に出たが、新しい生活が待っている訳ではない。傍観者の立場しか与えられていない。彼女には、公然と踏める舞台はない。つまり、世間の舞台の役者には成れないのである。

She was blue and discouraged, not because of fear that she would be taken, but because of the uncertainty as to her own future, what she was to do.<sup>(27)</sup>

たしかに、彼女に元気はない。自分の舞台があるか、それは今後の人生への不安である。今は、明日への明確な展望がない。

しかし、彼女は、町から森へ戻ると、再び着替える。喪服が彼女の過去を葬る儀式の道具であるとすれば、過去の生活からの決別が済めば、もう黒衣は要らない。

There was a gray travelling suit with a light-fitting little gray coat and she put them on.<sup>(28)</sup>

ここで、彼女がバッグの中から取り出した服装は、新たな人生の旅立ちにはふさわしい。そして、これを待っていたかのように、新たな、少なくとも彼女にとってはこれまで眼中になかった、光景が彼女の視界に入ってくる。

若くて逞しい夫 (a strong-looking big-shouldered young fellow) が畑でcornを刈っているところへ、妊娠している妻が夕食を知らせに来る場面を目撃する。Kitは、再び観劇の気分になる。

She was like one of the audience in a theatre, sitting and watching the progress of a play.<sup>(29)</sup>

彼女はこの夫婦にすっかり心を奪われ、身の危険も忘れてその場に釘付けにされてしまう。しかし、彼女には、離れて眺める、観劇のレベルまでしか与えられていない。次に、この夫婦の食卓の場面が紹介される。

The table was spread with a cheap but clean cloth and there were an open door and an open window. Kit went to within ten feet of the door and stood watching. ... Her determination not to have a child by him ... Her hunger for expensive clothes, for fast cars to drive ... Her going into the work with Tom ... “What did I want? What have I always wanted?”<sup>(30)</sup>

彼女の贅を尽くした生活、密造酒の仕事、妊娠をも避けて来た不毛な結婚生活。こうしたKit自身の生活と、この夫婦のa cheap and clean clothに象徴される、素朴で汚れのない、幸

せそうな生活とが、対比されている。彼らの若さと幸せに輝いている家庭へのドアは外に向かって開かれている。Kitはすぐそばまで来ている。しかし彼女は中に入れない。ここでも、その一員として自ら演ずる事は出来ない。ただ羨望の眼で見ることしか許されない。

Kit was remembering her own childhood in another little mountain house.<sup>(31)</sup>

この農夫の姿に、彼女の心は人生の原点である少女時代へとぶ。又、家屋も歴史を刻む。

Although she did not know it the foundation stones were all that was left of a large house that had once been the home of a wealthy slave owner. It had been destroyed by a marching Northern army during the Civil War.<sup>(32)</sup>

この若い夫婦の質素で小さな家の背後の古い土台 (foundation) には、栄華を極めて荒廃した家の歴史がある。ここには、Kitの再生へのメッセージが託されていると見ることが出来るよう。

## 8

この州からの脱出を考えて、森を出たKitは、途中、便乗を求めてガソリンスタンドに止まっている一台の車に近寄る。折しも、Kitを追う警官たちがオートバイでやって来る。彼女は素早くその車の助手席に乗せて貰う。警官の尋問に危機一髪の場面を迎えるが、車の男の機転で奇跡的に難を逃れると、Kitは自分を身を明かし、その車で逃亡を助けてくれるように頼む。男は了解するが、酒を飲んでいるので、Kitが代わって運転する。道中、男はJoel Hanafordと自己紹介をしてから自分を語る。

Joelの父は模範的な少年時代を送り、順調に出世し、名もない家の出でありながら、弁護士、検事、裁判官となり、町内の尊敬を集めている。Joelはそんな輝かしい父を知る町で育ち、戦争に行き、負傷して毒ガスにおかされ、男性としての機能も失ってしまい、廃人となって帰還した。それから酒を飲むようになった。おそらく傷の痛みか、癒しきれない心の傷で飲まずにいられないのであろう。

そんな彼の心をも知らず、父は政治的効果をねらって、公衆に向けて廃人のJoelをネタに愛国心を説く。

The speaker had spoken of his own sacrifice, for his country, made by sending into the war his only son.<sup>(33)</sup>

ここのthe speakerはJoelの父である。わが子の悲劇的な宿命や苦悩などには無頓着に、戦争犠牲者を持つことを誇らしげに語り、己の出世に息子の不幸を利用する父に、Joelは激しい怒りで身を震わせる。その効あって、裁判官に選ばれ、禁酒法の下、多くの違反者を獄に送る。しかも、その父は、家では不当に手に入れた酒にうち興じている偽善者である。さらに、I'm a wreck. I can't make my own living.<sup>(34)</sup> とあるように、戦傷で廃人と化し自活できないた

めに、軽蔑すべきその父親に扶養されている自分に、Joelの一層やり切れない思いがある。

明け方近く、二人は休憩にホテルにはいる。それぞれの部屋へ別れる前に、Joelは改めて、Kitに逃げてほしいこと、父のような偽善者にKitの裁判をさせたくないことなどを伝える。

“I don’t blame you,” he added, “but after you are gone ... of course I know who you are ... after you are gone I presume I’ll get good and drunk. I’ll be lonesome. Do you know what that means?”<sup>(35)</sup>

Kitとの別れを惜しむJoelのこの言葉には、彼の方でもKitとの出会いを貴重なものと捉えている事がわかる。彼の苦しみを理解してくれる人が何人いるであろうか、これがそんな人物との出会いかもしれない。Joelは、自分の部屋の戸口まで進み、再び振り向いて言う。

...“but you see I am only half a man and you want a man. If I was a bit more a man I’d be asking you to marry me,”<sup>(36)</sup> ...

ここには、Kitへの愛情と、永久に彼の結婚を阻む戦争の傷跡との間の辛さに耐えることを知る大人の姿がある。彼は人生に対しての一種の悲痛な抵抗をしている。彼には、まやかしの社会の中で、自ら苦悩を背負いながらも、生きることを信じ続ける精神力の強さと他人への心の寛さが感じられる。彼は、Kitの純粹さを見抜き、彼女を救った事を心から喜んでい

## 9

車中では、時折、中断して酒の瓶を傾けては、また話を続けるJoelに、Kitは親しい兄のような思を抱いたり、逆に彼の精神の疲れが痛ましく、両腕で抱いてやりたい思いに駆られたりした。そんな思いに、Kit自身の心に温もりが生まれ、彼女の心も癒された。

She ... had been lonely and this new man, come upon so accidentally, seemed to break her loneliness.<sup>(37)</sup>

彼女は、今、あのrumrunnerの生活に入って以来ずっと苦しんできた孤独から開放されようとしている。Joelとの出会いで、Kitにも活気が戻ってきている。さりとて、これは、彼女が新たな恋人と巡り会い、喜んでいる訳でもない。

She was exhilarated. It wasn’t, she told herself, that she was particularly attracted to the curious human being she had found and who had helped rescue her from the police. She thought it was something he stood for. There was a kind of bitter resistance to life in him that she liked. He had been defeated but he was mature.<sup>(38)</sup>

この陽気な気分は単なる男女間の好感や恋愛感情ではない。それは、彼の中に見られる人間的魅力にある。人生に抵抗して生きる人間の強さの確証である。Joelは敗北者ではあるが、成熟した大人である。

KitはJoelをTomと比較する。

... Tom, even in his best days, before the growth of greediness in him, was no more than a child.<sup>(39)</sup>

良いときのTomもJoelには及ばない。Tomには金、権力、家柄への子供じみた執念があった。Joelは、Kitにとって初めて遭遇した完成した大人の男性である。

Joelの存在によって、観劇の域を出られなかったあの森で見た若い農夫の世界が、いま再び、生き生きと蘇ってくる。若い農夫が妻のもとへ来て、荒れた手を妻の腹部に当てて、まだ生まれ出ないわが子を慈しむ場面を心に描く。ここで、顔に笑みを含めて、“I’ll not be here I guess when he awakes,”<sup>(40)</sup>と考えるKitには、この夫婦の世界はもはや彼岸のものではない。Kit自身が舞台へ登場する日が彼女に期待されている。

Kim TownsendはHemingwayの*The Sun Also Rises*の場合と比較している。

He (= Anderson) has Joel say to Kit: “I’m only half a man and you want a man,” but she sees “a kind of bitter resistance to life in him that she liked. He had been defeated but he was mature.” More than Brett Ashley saw in Jake, it is enough to send Kit on “a new kind of adventure”:<sup>(41)</sup>

Joel同様に戦争で性的能力を失っているJakes BarnesをみるBrett AshleyとJoelを見るKitを比べJoelとKitを高く評価している。

ちょうど自然界の夜明けに合わせるように、Kitの新たな人生への可能性が開かれた。

There was in her mind an almost definite notion of a new kind of adventure she might begin. She felt warm and alive. Young Hanaford had done that for her. She had been carried out of herself and her own problem and into the life of another puzzled human.<sup>(42)</sup>

若いJoel Hanafordとの出会いは、Kitに男性への信頼、そして人間としての生き方の教訓をもたらした。Kitはmateの存在を確信し、そのmateを求めて新たな旅に立つ。Kitの役者として、演ずる者として人生の舞台に向かう姿である。

おわりに

物語の順を追ってKitの成長を見てきたが、彼女を支えていたのは、the Southern Highlandsの山間に住む人々の持つ純粹さとプライドであったと言えよう。彼女の失望と孤独が始まったのは、自分の欲望を押し通し、Gordonと結婚し、Tomの経済力にこだわった時からであった。Tomも自らの地位や金銭に執着したとき、非情になり、残忍な行動をし、非人間的な男に変わった。Andersonの言うグロテスクな人物となった。

... the moment one of the people took one of the truths to himself, called it his truth, and tried to live his life by it, he became a grotesque and the truth he embraced became a

<sup>(43)</sup>  
falsehood.

よく引用されるAndersonのグロテスクの論理である。Kitの場合、彼女を救ったのは彼女の持つ純粋さであった。いわば周囲をグロテスクな者たちに囲まれながら、孤独に耐え、命を張ってTomと対峙したのは、その純粋さの力であった。さらに、希望を失い不安と孤独に落ちた時、彼女を救ったのはJoelであった。しかし、そのJoelの強さ、優しさ、男らしさを発見したのはKitである。ここに、共に理解し認めあう二人の男女がある。彼らは他者を信じ、他者を愛し、他者に依存せず自らを律して生きて行く勇気と自信を得た、成熟した大人の人間である。

最後にAndersonの女性像にふれておきたい。

彼の描いた初期の頃の女性像は概ね、自らの内面的欲求を満たすことが出来ずに苦悩する女性たちが多く、固定観念にとらわれ、男の裏切り（現実）を認める事が出来ずに、激しい他者への渴望を抱きながら、求婚者をも受け付ける事が出来ないAlice Hindmn (“Adventure”)や、周囲の誤解に振り回され、ついには神経症に陥り、夫やわが子とも心を通じ合うことの出来ないLouise Bentley (“Surrender”)のように、自己の生を追求できない女性たちであった。又、中期では、Clara Butterword (*Poor White*)やAlice Grey (*Dark Laughter*)など、Kitのように自己実現を果たしているが、根底において己の利益が優先している。又、一方でGrimes老婆 (“Death in the Woods”)は、Kitを越えるaltruismに徹している。他者への奉仕の心が終始貫かれていて、自己の生を全く犠牲にしている。あまりにも聖人に近い雰囲気を漂わせ、生きた人間としての豊かな感性や苦悩の生々しさが伝わりがたい。Grimesは限りない優しさを持つが、Mary Ann Fergusonからは、She is a symbol, not a real human being.<sup>(44)</sup>と批判される。それに対してKitは、人間の力強さと知恵を感じさせ、生き生きとした魅力の漲る、ダイナミックな優しさを持った女性である。Welford Dunaway TaylorはKitがAndersonの理想の女性であると言う。

Within the context of Anderson's novels, she epitomizes the virtues of selflessness and compassion; she may be seen as Anderson's ideal protagonist.<sup>(45)</sup>

確かにKitはAndersonの描く女性の中で、成熟した女性と言える。ここではふれる余裕はないが、Kitには、Andersonの四人目の妻にして、彼の理想的な女性であった、Eleanorとも何か通底するものを感じる。彼女はAndersonからの愛を受けながらも、些かの揺るぎもなくYWCAの産業部門にあって、東奔西走して女性労働者の為に献身努力していた。そのaltruismの精神は、目覚めた後のKitに通じる。Kitは、Andersonの理想の妻とも重なる。

さらに、Kitの最後の旅立ち、晩年都会の華やかな舞台から身を引き、ひたすら名もない地方の人々の生活の中に真の人間の姿を追い続けた作者自身の姿勢とも通じる。

物語の終末で、Kitが、a new kind of adventureと考えるとき、それは、生きて行くことは

adventureであることの発見である。‘Life Not Death Is the Great Adventure’の実践である。これはVirginiaにあるAndersonの墓碑に刻まれた彼の言葉である。

注

- (1) vide Welford Dunaway Taylor and Charles E. Modlin (ed.) *Southern Odyssey* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1977) pp. 217-8
- (2) *ibid.*, p.218
- (3) Glen. A. Loveは*New American* (Lewisburg: Bucknell University Press, 1982)の中で歴史小説としても読まれている *Poor White* を引き合いに *Kit Brandon* を an updated *Poor White*, mirroring in the life of its young striver, the transition of a region of its bucolic to industrial. There is the recitation of the rape of a once fair country: (p.208) と書いている。
- (4) Kim Townsend, *Sherwood Anderson* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987) p.299
- (5) Sherwood Anderson, *Kit Brandon* (New York: Arbor House, 1985) p.29
- (6) *ibid.*, p.28
- (7) *ibid.*, p.62
- (8) *ibid.*, p.82
- (9) Glen A. Love, *New Americans* p.210
- (10) Sherwood Anderson, *Perhaps Women* (New York: Paul P. Apple, 1970) pp.41-2
- (11) Sherwood Anderson, *A Story Teller's Story* (New York: The Viking Press 1969) p.195
- (12) *Kid Brandon* p.78-9
- (13) *ibid.*, p.79
- (14) Irving Howe, *Sherwood Anderson* (Stanford California: Stanford University Press, 1966) p.234
- (15) *Perhaps Women* p.47
- (16) *Kid Brandon* p.155
- (17) *ibid.*, pp.49-50
- (18) *ibid.*, p.310
- (19) *ibid.*, p.310
- (20) *ibid.*, p.253
- (21) *ibid.*, p.30
- (22) *ibid.*, p.5
- (23) *ibid.*, p.250
- (24) *ibid.*, p.343
- (25) *ibid.*, p.342
- (26) *ibid.*, p.347
- (27) *ibid.*, p.352
- (28) *ibid.*, p.355
- (29) *ibid.*, p.356
- (30) *ibid.*, p.358
- (31) *ibid.*, p.357
- (32) *ibid.*, p.357



- (33) *ibid.*, p.369
- (34) *ibid.*, p.370
- (35) *ibid.*, p.371
- (36) *ibid.*, p.372
- (37) *ibid.*, p.366
- (38) *ibid.*, p.372
- (39) *ibid.*, p.372
- (40) *ibid.*, p.372
- (41) Kim Townsend, *Sherwood Anderson* p.300
- (42) *Kit Brandon* p.373
- (43) Sherwood Anderson, *Winesburg, Ohio* (New York: The Viking Press. 1967) p.25
- (44) Mary Anne Ferguson, *Images of Women in Literature* (Boston: Houghton Mifflin Company 1986) p.22
- (45) Welford Dunaway Taylor, *Sherwood Anderson* (New York: Frederick Ungar Publishing Co. 1977) p.94